# 地元のYOSAKOI（よさこい）姫

## 夢幻天舞×小泊権現漁火会

津軽に暑い季節がやってきた。この時期、短い夏を惜しむように、各地で夏まつりが行われるが、そのまつりに花を添え、躍動感あふれる踊りでまつりを盛り上げる「よさこいソーラン」を踊るチームが、町には２つある。

彼らは、その成り立ちや目指す方向など性格が違うチームだが、地元に根ざすよさこいチームとして、毎年行われる「なかどまりまつり」の盛り上げに一役買っている。

彼らが、地元の人たちであふれかえる夏まつりにどんな気持ちで向かうのか、その意気込みと情熱を取材した。

「夢幻天舞」は、前身が役場職員組合のチーム。全国的なよさこいブーム到来の中、なかさとまつりで「よさこい中里」をやることになり、役場でも盛り上げようと職員が中心になってチームを結成したのが始まりだ。

2004年に現在のチーム名「夢幻天舞」となったあと、2008年あたりから職員以外の人が中心を占めるようになり、現在は本当のよさこい好きのみが集まっている。

子持ちのお母さんが多く、練習する中央公民館のホールには、子どもたちが遊んでいる姿がちらほら。

**Specification**　夢幻天舞（むげんてんぶ）

- **代表**…鎌田　知美
- **メンバー数**…16人（男１人、女15人、ママさんを中心にすべて大人）
- **平均年齢**…約32歳
- **結成年**…夢幻天舞と名乗ったのは2004年、前身は町職員組合
- **練習日**…毎週水・金曜日
- **練習拠点**…中央公民館大ホール
- **出演する主な行事**…夏まつり（施設のまつりなども）、町民祭、チャリティイベント、結婚式、馬市まつり、賽の河原例大祭など
- **チームの特徴・セールスポイント**
  楽しむ（うまさにこだわらない）。いつもにぎやか。他チームと比べない。指導者がいない（メンバーみんなで振り付けを考える。全員が指導者であり生徒）
- **チームのモットー・目標**
  人数を増やして大会出場が目標。「夢はでっかく！見ているみんなを感動させたいっ！」
- **ブログURL**…http://blog.livedoor.jp/mugentenbu/

**「YOSAKOIソーラン」とは？**

高知県の「よさこい祭り」と、北海道の「ソーラン節」をミックスした、北海道札幌市を会場に行われる新しい祭りのこと。毎年６月上旬に行われる。１人の学生が、高知県で見た「よさこい祭り」に感動し、北海道でもこのようなことがができないかと思い、実現させたのが祭りの始まりだといわれている。1992年に始まったこの祭りは、最近では200万人近くの観客を集める北海道の一大イベントとして成長。参加チームは道内のみならず、道外、海外からも参加者がある。

「YOSAKOIソーラン祭り」公式ホームページのよると、踊りの決まりはたったの２つで、「鳴子を持って踊ること」と「演舞の曲にソーラン節のフレーズを入れること」だそうだ。参加チームは、自分たちのオリジナリティを発揮し、観客をいかに楽しませるか、自由な発想で挑戦できるのが、この祭りの魅力と思われる。

Specification

## 小泊権現漁火会（こどまり ごんげん いさりびかい）

■**代表**…柏崎　由美子
■**人数**…10人（女10人、子ども６人、お母さん方４人）
■**平均年齢**…約23歳（平均精神年齢は11歳！）
■**結成年**…2001年
■**練習日**…毎週木曜日
■**練習拠点**…すくすくこどまり館
■**出演する主な行事**
　こどまり春物語ツアー、まつり、町民祭、夕涼み会（老人生活福祉センター）、結婚式、施設慰問など
■**チームの特徴・セールスポイント**
　メインは子どもたち。今は、学校の部活などでも人が少ない。みんなで集まり、楽しく踊って楽しもうというのがこのチーム。誰でもおいで、という姿勢です。
■**チームのモットー・目標**
　踊り手が笑顔でないと、観客も笑顔になってくれないので、笑顔で踊ってくれればそれでいい。地域に貢献したいということもある。

小泊権現漁火会は約11年前、小学校の家庭教育学級で福田先生がよさこいのビデオを見せたのがきっかけとなり、学校の図書館でお母さんたちが踊り始めたことからスタート。子どもたちとも一緒に踊って楽しんでいたのが結成当初である。

途中、子どもたちが大きくなってメンバーが徐々に抜けていったが、その後新しい子どもたちが入り、現在のメンバー構成に至る。

踊り手に子どもが多いこともあり、練習中は元気な声が響き渡る。

2012
なかどまりまつり直前
情熱特集

# 翔べ！舞え！

## 演舞に達成感を見い出す「夢幻天舞」

このチームは、踊り手が全員大人だということもあり、ダイナミックで洗練された踊りが持ち味だ。

練習では、拠点である中央公民館へ集まってくるときはリラックスムード。子どもや学校の話など、まるで井戸端会議のようなおしゃべりが始まる。しかし、ストレッチを終えて、いざ練習に入ると、スイッチが入ったかのように一変する。それだけ、このチームの高い意識がうかがえ、目標が「大会出場」というのもうなずける。

うまくなるために工夫していることは「数えながら踊ること」や「メンバー同士でお互いに踊りをチェックする」ことなどだそうで、振り付けはメンバー全員で考え、立ち位置を確認したりする。夢幻天舞は、大会出場するには人数が足りなく、イベントなどで踊る際には、どうしたら人数が多

夢幻天舞

# よさこいにかける姿勢と情熱

小泊権現漁火会

## 〝笑顔〟がキーワードの「小泊権現漁火会」

小泊権現漁火会の大きな特徴は、メンバーの半数以上を子どもたちが占めることで、観客にほほえましさを与えるチームだといえる。そういったこともあり、練習でも子どもたちのにぎやかな声が響き渡っていた。

チームに参加する子どもたちに、よさこいは好きか聞いてみると「大好き！」と全員が即座に答えた。「振り付けを新しく覚える」ことや「難しい踊りをできるようになることが楽しい」のだという。

そんな子どもたちだから、踊ったあとは「おもしろかった」「すっきり、さっぱりする」「気分がいい」といった感想が出てくる。大人たちが「すごく疲れる」と言っていたのとは対照的で、子どものパワー恐るべし、といった感じだ。

小泊権現漁火会は、誰かが探してきた曲をしっかり覚え、代表の柏崎さんが振り付けを考えてみんなに教

いように見せられるか、立ち位置を工夫しているという。そのほか、衣装を手作りしたり、他チームの踊りやDVDを見たりし、いい部分は盗んで、常に自分たちのパフォーマンスが向上するよう努力を惜しまない。また、演舞に使う曲は、自分たちのオリジナル曲で、最新の「北の海神（わだつみ）」は、知り合いの作曲者と歌い手が曲をつくり、作詞をメンバーの1人がするなど、さまざまな要素にこだわりを感じさせる。

そうした積み重ねの集大成が、人前で踊ることにつながっていて、踊り終えた後のメンバーは〝達成感〟を感じるという。

「特に夏なんかは練習きついが、終わったあとの達成感がたまらない。これは、踊らないと味わえないもの」

この言葉にメンバーの思いが集約されていた。これがあるからこそ、彼らは踊り続けるのだ。

Mugentenbu

Kodomari gongen isaribikai

えるという。途中、試行錯誤しながら、最終的にみんなで振り付けを決定するというスタイル。衣装の制作は、メンバーの1人が一手に引き受け、10人全員分を完全オーダーメイドで作ったそうだ。

そんなチームのキーワードは「笑顔」。みんなにとって踊ることとは？という質問にメンバーはこう答えた。

「人を楽しませること。みんなを笑顔にさせること」

練習のステージで、笑顔はあまりない。でもそれは、練習に真剣だから。本番を笑顔で踊れば、観客を笑顔にすることができる。自分が笑顔でなければ、人を楽しませることはできない。そう言っているのだろう。

柏崎さんは「地域に貢献できれば」とも言っていた。町の人口が減少し、子どもたちの数が少なくなる中、彼女たちの導き出した答えが「よさこい」で人々を元気にすることだったのではないかと思う。